

## ホウレンソウ（高原雨よけ）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
春・秋	○ ——— (1週間間隔で4a播種)											
夏	○ ——— (3日間隔で4a播種)											
主な作業	は 間 収 種 引 穫											

ホウレンソウ アカザ科、原産地：コーカサス地方

作物名 ホウレンソウ

学名 Spinacia oleracea L.

作型 高原雨よけ

### 技術体系

#### 1 作型の特徴

平坦地の栽培が高温で難しくなる時期に、高冷地の冷涼な気候を利用して栽培する作型である。

春から夏にかけて日長が長くなる時期は、抽だいが起こりやすい。

#### 2 適応地域

標高400m以上の高原地域

#### 3 栽培条件

##### (1) 温度

発芽適温は15℃～20℃で25℃以上で発芽率が低下するため、夏の高温時は催芽処理や遮光（晴天時の50%程度）を行うなど発芽を揃える。

生育適温は15℃～20℃であり、高温になると生育障害を招き、生育が悪くなる。

##### (2) 土壌条件

排水が良好で膨軟な土質が適する。酸性にきわめて弱いためpH6.0～7.0に石灰類で調整する。

##### (3) 光

ホウレンソウの光飽和点は2万～2万5千ルクス程度で、補償点は1,500ルクスである。

#### 4 施設整備

単棟ハウス、灌水施設

#### 5 経営目標

(1) 収量 春・秋まき栽培 1 t / 10 a

夏まき栽培 0.7 t / 10 a

(2) 投下労働時間 720時間 / 10 a

(3) 所得率 50%

(4) 経営規模 のべ180 a

(施設面積) (40 a)

(家族労働力2人の場合)

### 栽培技術

#### 1 品種と特性

##### (1) 春まき栽培

抽苔が遅く、生育が早い品種を選択する。

抽苔は密植によっても促進されるため、特に日長の長い時期は株間を広くする。

##### 「トリトン」

べと病レース1～7に抵抗性を持つ。濃緑、平滑な広葉で、葉先がややとがり浅く欠刻が入る。極晩抽性の品種である。

##### 「ニュー新太郎」

べと病レース1～5の抵抗性を持つ。葉は極濃緑色で欠刻の浅い長円形で葉肉も厚い。草姿は立性で葉柄は弾力があるので折れにくい。

##### (2) 夏まき栽培

梅雨期から夏にかけて栽培を行うため、多湿、高温条件に強い品種を選択する。発芽後1週間程度、遮光を行い発芽を揃える。

##### 「アクティブ」

べと病レース 1, 3 の抵抗性を持ち、フザリウム菌による萎ちょう病にも強い。剣葉の一代交配種で、浅い欠刻のある広葉で葉色は濃い。草姿は立性で葉身と葉柄のバランスが良く、株張りも良い品種である。

「アクティオン」

べと病レース 1 ~ 4 に抵抗性を持つ。葉は濃緑色で、浅い切れ込みが入る。比較的晩抽性の品種である。

(3) 秋まき栽培

収穫期の低温による被害が発生しやすいので、耐寒性に優れた品種を選択する。

「アトランタ」

べと病レース 1, 3, 4 の抵抗性を持つ。剣葉の一代交配種で、葉は光沢のある鮮緑色で浅く欠刻が入る。草姿は極立性で収穫調整が容易な品種である。

「ミストラル」

べと病レース 1, 3 ~ 5 の抵抗性を持つ。剣葉種で、葉は光沢のある濃緑色で厚みがあり、浅く欠刻が入る。草姿は立性で収穫調整が容易な品種である。

2 播種準備

ハウレンソウは栽培期間が短く、直根が土中深く入るため、通気性・排水性などが良く、膨軟な圃場を好む。化成肥料のみでの連作は避け、良質の堆肥を毎年休耕期を利用し 2 t / 10 a 施用する。  
<排水路の整備>排水の悪い圃場はプラウでハウス周囲に排水路を整備する。

3 施肥基準量

施肥量は、作土の pH・EC を測定して決定し、肥料の過剰な施用をさける。

施肥量 (成分)

	基 肥 (10 a 当たり成分 k g)				
	1 作目	2 作目	3 作目	4 作目	5 作目
N	20	10	0~1	0~5	5
K <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	30	15	0~15	0~5	5
K <sub>2</sub> O	15	10	0~10	0~5	5

4 播種・灌水

一斉発芽による揃った生育を促すため、播種前・耕起前に必要な水分を補給し適湿にする。

播種は、真空播種機、シーダーテープなどを用いて行う。

条まきを基本とし、間口 5.4 m のハウスで 28 ~ 30 条を目やすとする。

覆土は種子がかくれる程度に行い、軽く鎮圧する。発芽後約 10 日間 (発芽揃いまで) は乾かさないうように適湿を保つ。草丈 10 cm 以後は灌水を控える。

不足の場合は日中でも灌水するが、べと病の予防のため夕方には灌水しない。

高温期の播種は発芽揃いが悪くなるため発芽促進処理を行ってある種子を用いるか、3 ~ 4 時間浸水し冷蔵庫内で一昼夜催芽して播種を行う。

発芽促進処理

- ・プライマックス処理 (種子表面を割ってある種子)
- ・ネーキッド種子 (種子表面を削ってある種子)

5 間引き

高温期は徒長しやすいので、発芽揃い後は早め (本葉 2 ~ 3 枚時まで) に行い株間は広め (6 cm ~ 10 cm) とする。

6 病害対策

べと病対策では抵抗性品種の利用が基本であるが、株間を広げ、風通しをよくし、過湿にならないように排水路を整備する。

萎ちょう病の対策として、春の第 1 作終了後をめどにクロルピクリン・ダズメット剤による土壌消毒を行うほか地温を低下させ苗立ちを良くするため、梅雨明け ~ 8 月中旬まで遮光資材を用いる。播種前日までに遮光資材を屋根に被覆し、播種後 1 週間をめどに除去する。

7 収 穫

出荷規格に合わせた適期収穫をするが、生育日数の目安は次のとおりである。

- ①春まき栽培      3月播種45～50日  
                     4～5月播種35～40日
- ②夏まき栽培    生育日数28～35日
- ③秋まき栽培    9～10月播種40～55日  
                     11月播種60～80日